

第46回 信行寺仏教講座（和讃篇）

恩徳讃「如来大悲の恩徳は」

令和6年12月8日（日）

如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も 骨を砕きても謝すべし

（現代語訳）

わたしたちをお救いくださる阿弥陀仏の大いなる慈悲の恩徳と、教え導いてくださる釈尊や祖師方の恩徳に、身を粉にしても骨を砕いても、深く感謝して報いていかなければならない。

出典・・・親鸞聖人の兄弟子、聖覚法印

『聖覚法印表白文』

法然聖人の六七日法要の際、その恩徳を讃嘆した表白。

つらつら教授の恩徳を思えば、実に弥陀悲願に等しき者か。骨を粉にしてこれを報ずべし。身をくだきてもこれを謝すべし。

七高僧の第5祖・善導大師

『観念法門』



敬ひて白す。一切の往生人等、若しこの語を聞かば、即ち声に應じて悲しみて涙を雨ふらせ、劫を連ね、劫を累ねて身を粉にし、骨を砕きて、仏恩の由来を報謝して本心に称すべし。

『尊号真像銘文』（親鸞聖人）

「倩思教授恩徳実等弥陀悲願者」といふは、師主のをしへをおもふに、弥陀の悲願に等しとなり、大師聖人（源空）の御をしへの恩おもくふかきことをおもひしるべしとなり。「粉骨可報之摧身可謝之」といふは、大師聖人の御をしへの恩徳のおもきことをしりて、骨を粉にしても報ずべしとなり、身を摧きても恩徳を報ふべしとなり。よくよくこの和尚（聖覚）のこのをしへを御覧じしるべしと。

語句説明

「如来大悲」・・・

「如来」とは阿弥陀如来を指すが、そこには釈尊も十方諸仏もおさめられる。釈尊は弥陀の名号を讃嘆して浄土往生を私に勧める如来であり、十方諸仏はその釈尊の説法が真実なることを証明し勧める如来だからである。

弥陀・釈迦・諸仏の関係

弥陀・・・私を浄土に生まれさせ、仏にしてくださる如来

釈迦・・・阿弥陀仏の救いを私に勧める如来

（浄土三部経）

諸仏・・・釈尊が説く阿弥陀仏の救済が真実であることを証明する如来（『仏説阿弥陀経』の六方段）

語句説明

「恩徳」・・・

「恩」の原意はサンスクリット語の「クリタ」で、「為されたこと」という意味。「恩」という漢字は「因」の下に「心」がある。つまり、私という結果を支えてくださっている原因に心を寄せていく、その気づきの中で開かれる世界が「恩」である。

語句説明

「身を粉にしても報ずべし」・・・

次の「骨を砕けても謝すべし」と重さは同じ。
ただ言葉をかえて、その恩徳の広大なことを述べ、それに対する報恩の道を我々に勧められる。

助動詞「べし」について

- ① 推量・・・（きっと）～だろう、～に違いない
- ② 意志・・・～う（よう）、～つもりだ
- ③ 可能・・・～ことができる
- ④ 当然・・・～はずだ、～べきだ
- ⑤ 命令・・・～せよ
- ⑥ 適当・・・～のがよい

語句説明

「師主知識」・・・

七高僧（龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導・源信・法然）を指す。先にあげた『尊号真像銘文』には、「師主のをしへをおもふに、弥陀の悲願に等しとなり、大師聖人（源空）の御をしへの恩おもくふかきことをおもひしるべしとなり」と言われているところから見て、ことに恩師法然聖人を中心にして七高僧の教えの恩徳を讃嘆されていることが知られる。

「恩に報いる（報恩）」ということ

早島鏡正『正像末和讃 ～親鸞の宗教詩～』

報恩とは「なされたことを知る」ということであり、阿弥陀仏がわたくしにたいしてなにをなされたか、そのなされたことを知る、すなわちそれを信ずることが、そのまま阿弥陀仏への報恩である、ということを話しました。つまり、阿弥陀仏の本願のおこころを疑いなく信じて、他力の信を得るということが、とりもおさず、わたくしの仏にたいする報恩になるというのであります。それは何故か。阿弥陀仏の願いは、わが仏の願いのところを知って欲しいと願われて、あらゆるでだてをもってわたくしに働きつけているからであります。そうした仏の願心にこたえるのが、わたくしの信心獲得ということであります。たとえば、親のところが子に領解されれば、そのことが子にとっての親への報恩となり、親の願いがみたされるのとおなじであります。